

名駅「浸水」

9月25日未明、地下鉄東山線の名古屋駅で冠水があり、始発から約9時間にわたり運休した。朝の通勤通学の時間帯を中心に15万人に影響する「都市災害」となった。早朝にニュースで知り、迷いながら地下鉄星ヶ丘駅に向かった。高畑と池下間が不通ということで、とにかく本山まで乗った。名城線に乗り換える通勤・通学客で、本山駅は大混雑していた。

市交通局は近隣の「JPタワー名古屋」の工事現場で、下水管を一時的に塞いでいた栓が大雨の水圧で崩れ、名駅地下への浸水につながったと発表した。施工者竹中工務店社長も会見で陳謝した。地下鉄復旧に9時間もかかったことについて、市交通局は排水と電機の点検のためという。それにしても、名古屋の「大動脈」の脆弱さを見せつけることになった。

写真は新聞記事をもとに、27日夕方に名駅の現場あたりを歩いて撮ったものである。新聞の写真では濁流が流れていた階段だと思うが、通常のように使われていた。ただ、隣のエスカレーターは浸水の影響で利用できないと書かれていた。現場を歩くと雰囲気分かる。

日本経済新聞9月27日朝刊「明日の名駅」によると、名古屋市は2016年度にもリニア中央新幹線の開業をにらんだ名古屋駅周辺のまちづくり整備計画を策定する。計画のたたき台となる構想を近くまとめる。同構想に基づき駅から高速道路へのアクセス向上策、駅の東西を結ぶ通路設置などの個別プロジェクトで今秋以降、関係者間の調整に入り整備計画を練り上げる。名駅の再開発が具体化に向け一歩踏み出す。

今でも名駅地区は超高層ビルの建設ラッシュだ。手前が旧「大名古屋ビルヂング」、奥が浸水事故の「JPタワー名古屋」である。このほかにも高層ビルが建設ないし計画されている。「リニア効果」を期待した大規模再開発であるが、かねてから指摘されてきたように、名駅地区は脆弱な土地であることを忘れてはならない。今回の名駅「浸水」を災害への警鐘と受け止めるべきではないか。

(2014年9月29日)

